（城西人文研究第22巻第1号）

アンドレ・ジッドの方法 XIII

――『インモラリスト』―そのマニュスクリを追って（3）――

鈴　木　たけし

I．レジュメ

方法XI，XIIに続き，ジッドの『インモラリスト』のマニュスクリを少しずつ追っていく。

今回は，第一部，II，pp.380−383（プレイアード版）にとどめる。病をえたミッシェルがビスクラについたときからの章となる。

第一段落　p.24，*l*.1−p.25，*l*.33

ミッシェルは，死んだようにビスクラに着いた。そこでのはじめの日日，彼は，ただそこにあるだけだった。自分が誰で，どこにいるかもわからず，マルスリーヌの存在だけが確かだ。

しかし，生のきざしがみえてきた。それは，かすかな光だが，彼はマルスリーヌにほほえむことができた。そして語らなければならない大切なことは，死がその翅で彼にそっと触れたこと，自分がまだ生きていることの驚き，そして一日が思いがけぬ光となったこと。

そしてなお，ゆっくりと過ぎる日日が続く。時間のない日日が流れる。彼は，ただ見る。太陽を，影を，影の動きを，何も考えず視る。彼は，まだ弱く，全てが疲れさせる。

ただあることが彼の全てだった。

第二段落

A: p.25, *l.*34−p.27, *l.*73

ある朝，マルスリーヌは，アラブ人の子を連れてきた。

褐色の肌，大きな静かな目，動物のようなかわいい優雅な動き，少年バシルは，裸のうでをあらわにしマルスリーヌにキスをする。ガンドゥーラの下は裸だ。

少年は，ナイフで笛をつくりだす。はじめこの子の存在に彼は混惑したが，すぐに興味をいだきはじめる。

裸の足，踝と足首のかわいさ，髪はアラブ風に剃られ，総がとれ穴のあいたシェシア帽をかぶり，少しずり落ちたガンドゥーラからかわいい肩がみえる。

始めてミッシェルは動く。その肩にふれたいと身をこごめ，笛をみせてくれというしぐさをする。

翌日も彼はバシルを待った。少年は見つからなかった。彼は泣くほど悲しむ。

B: p.27, *l.*74−p.27, *l.*92

翌日，バシルはあらわれた。前日のように笛づくりを始めたが，ナイフで指を傷つけた。彼は笑って，血で輝く傷を見せた。笑うと真白な歯をみせる。傷をなめる舌はねこのように赤い。彼の健やかな小さな肉体は美しい。

その翌日，ビー玉を彼はもってきて，ミッシェルに遊ぼうとせがんだ。ミッシェルは汗みどろになり遊び，疲れきる。子供は「病気なの」ときく。その声のひびきはすばらしい。

第三段落 p.27, *l.*93−p.28, *l.*117

バシルと遊んだ数時間後，ミッシェルは吐血する。血塊は黒く粘り恐ろしげなかたまりだ。恐怖と怒りを同時に彼はいだく。恐怖は死への恐怖。なぜなら回復にむかっていると思っていたから。生命を愛し始めていたから。怒りは，生きたいという欲望のゆえだ。

バシルの美しく輝く血を思いながら，歯をくいしばり，こぶしをにぎり，生きたいと彼は心で叫ぶ。

II．テキスト分析

第一段落

ここで特徴のある語・句・文は，次の3点と考えられる。

1．第一章から続く自己の喪失を示す語・句・文。

p.24, *l.*2

…souvenir est sans voix.

声のない記憶

p.24, *l.*2

Je ne savais plus ni qui, ni où j'étais.

私は誰か，どこにいるかも知らなかった。

p.24, *l.*3

…au-dessus de mon lit d'agonie, Marceline, ma femme, ma vie, se pencher.

私の苦しみのベットの上に，私の妻，私の生命であるマルスリーヌが身をかがめる。

p.24, *l.*4

…ses soins…son amour seul, me sauvèrent.

彼女の世話，彼女の愛だけが私を救った。

唯一人ミッシェルを救える妻の優位の下，彼は，自己の確認もできぬほど，自己を失なっている。

2．死と生を示す語・句・文。

p.24, *l.*5

Un jour enfin, comme un marin perdu qui aperçoit la terre, je sentis qu'une lueur de vie se réveillait.

ある日とうとう，大地を見つけたさ迷える水夫のように，生命のかすかな光が目覚めるのを感じた。

そして重要なこととして，次の3点があげられる。

p.24, *l.*8

…la mort m'eût touché, comme l'on dit, de son aile.

死が，よく言われるように，その翅で私をかすめたこと。

p.24, *l.*9

…il devînt pour moi très étonnant que je vécusse.

私が生きていることが，私にとって大変な驚きであったこと。

p.24, *l.*10

…le jour devînt pour moi d'une lumière inespérée.

一日が，私にとって思いがけぬ光となったこと。

生命の蘇生は，明確な言葉であらわされていない。死さえもそうだ。生命は「かすかな光」であり，生きていることが今さらのように気付かれ，驚きとなる。直喩も凡様で「さ迷える水夫の大地の発見」となる。そして死も，「翅で

かすめる」ものだ。

3．時　間

時間，動詞の時制をみてみよう。

p.25, *l.*27

Là coulèrent des jours sans heures. Que de fois, dans ma solitude, j'ai revu ces lentes journées!...

そこで（ミッシェルの部屋），時間のない日日が過ぎていった。いくどとなく孤独の中で，ゆっくり流れる日日を，私は見つめつづけた。

時間は止まっている。過去でも現在でも未来でもない。静止がそのままずっと続くようだ。突然，動詞は直説法現在におかれる。

p.25, *l.*28

…Marceline est auprès de moi. Elle lit; elle coud; elle écrit. Je ne fais rien. Je la regarde. Ô Marceline!... Je regarde. Je vois le soleil; je vois l'ombre; je vois la ligne de l'ombre se déplacer; j'ai si peu à penser, que je l'observe.

マルスリーヌは私のかたわらにいる。彼女は読み，縫い物をし，手紙を書く。私は何もしない。私は彼女を見つめる。ああ，マルスリーヌ！　…私は見つめる。日を見る，影を見る，影が移るのを見る。私は，ほとんど考えないので，それを観る。

突然，動詞は直説法現在におかれる。それは，文章に活気をあたえる現在ではない。そのままずっと続く静止の現在，その時のミッシェルにとっては変らぬ事実を示す現在といえるだろう。

第一段落は論理的な文だ。全てがひとつの小世界，閉ざされ静止した時間と空間をつくるために構成される。

なぜ話すか。理由は，ある日，生命のかすかな光が目覚め，マルスリーヌにほほえむことができたから。

なぜ語るか。理由は，死が私にふれ，生が私にとって驚きとなり，日日が私にとって思いがけぬ光となったことが重要だからだ。今まで生きていることを理解しなかった私には，大切なことだから。

話し語る理由は，弱く静かにさす光にすぎない。

そして，彼の「生きる」家についての客観的な描写がある。ベット，部屋，テラス，そこからみえる風景。全てはそこで静止し，閉ざされた小さな空間を示す。

最後に時間の静止が，現在形動詞によって語られる。ベットの側にマルスリーヌがいて何かをする。ミッシェルは何もしない。何も考えない。静止している。そしてただ影のうつろうのを見る。

ミッシェルは，空間においても時間においても，生のきざしがあらわれたとはいえ，静止して閉ざされている。故に，「あることが私にとって充分なこと」となる。

第二段落　A

この段落は，段落１の終りと同様，動詞は直説法現在におかれる。その用法は段落１と異なる。その理由をさぐりながら，この段落の文の特徴をみてみよう。

１．流れる時間を示す語・句・文。

p.25，*l.*34

Un matin…

ある朝

p.26, *l.*50

Au bout d'un peu de temps…

少したつと

p.26, *l.*60

A présent

今

p.26, *l.*62

Le lendemain

明日

1ページ程の文の中で，時間の経過を示す語が漸次あらわれる。静止した時が動きだした。

2．空間の中での動きを示す語・句・文。

p.25, *l.*34

Marceline entre…

マルスリーヌが入ってきた。

p.25, *l.*35

Je t'amène un ami.

お友だちを連れてきたわ。

p.25, *l.*38

L'enfant…se retourne vers Marceline… avec un mouvement de grâce animale et câline, l'embrasse avec un geste qui découvre ses

bras nus.

子供はマルスリーヌの方へむき，…動物的でかわいい優雅な動きで，彼女にキスをする。そのしぐさが彼の裸の腕をあらわにする。

p.26, *l.*47

Les petit s'assied… sort un couteau… un morceau de djerid, et commence à le travailler.

子供は坐る…ナイフとヤシの枝木をとりだし，細工しはじめる。

p.26, *l.*57

J'ai besoin de la toucher.

私は，それ（少年の肩）にさわりたいと思う。

p.26, *l.*58

Je me penche; il se retourne et me sourit. Je fais signe qu'il doit me passer son sifflet, le prends et feins de l'admirer.

私はかがむ。彼はふりむき私にほほえむ。私は，笛を手渡すよう合図し，うけとり，それに感心するふりをする。

静止した空間に，突然の闖入者があらわれる。時間と同様，動きがはじまる。マルスリーヌ，アラブの子供が動く。そしてミッシェルも言葉はないがみぶりをする。

3．肉体の健康（いくぶんか官能）をあらわす語・句・文。

p.25, *l.*36

un petit Arabe au teint brun.

褐色の肌をしたアラブの子供。

p.26, *l.*40

de grâce animale

動物的優雅さで。

p.26, *l.*42

…qui découvre ses bras nus.

裸の腕をみせている。

p.26, *l.*42

…il est tout nu.

全く裸だ。

p.26, *l.*51

Les pieds sont nus: ses chevilles sont charmantes et les attaches de ses poignets

彼は裸足だ。くるぶし，足首は魅力的だ。

p.26, *l.*56

La gandourah, un peu tombée, découvre sa mignone épaul. J'ai besoin de la toucher.

ガンドゥーラが少しずれ落ち，彼のかわいい肩をあらわにする。私は，それに触れたいと思う。

生命は現実のモデルをミッシェルに示す。かすかな光でなく，生命の輝く，健康な肉体を示す。

4．「私」の動きを示す語・句・文。

p.26, *l.*57

J'ai besoin de la toucher.

p.26, *l.*58

Je me penches. Je fais signe qu'il doit me passer son sifflet, le prends et feins de l'admirer.

5．自己の喪失を示す語・句・文。

p.25, *l.*37

Je suis plutôt un peu gêné et cette gêne me fait fatiguer. Je ne dis rien…

私はむしろいくぶんいらだち，このいらだちが私を疲れさす。

p.27, *l.*68

Je suis triste à pleurer de la voir revenir sans Bachir

私は，彼女（マルスリーヌ）が，バシルをつれないでもどってきたのを見て，涙がでるほど悲しかった。

「私」は動きだす。はじめ自己の弱さをみせるが，ミッシェルは「見る」過程から，「ふれる」動きをはじめる。失なわれていた自己が，かすかな意志をみせはじめる。

第二段階 A でも論理的な構成がみられる。時間が明確な時を示す語により進む。

un matin → au bout d'un peu de temps → A présent → le lendemain

ある朝→少したって→今→翌日。その経過にしたがって，マルスリーヌ，アラブ少年が次から次へと動く。彼女は入り，少年を連れ，少年は彼女にキスをし，ナイフと枝をとりだし細工する。それを見て，ミッシェルはふれたいと思う。

この時間，空間の突然の動きを示し，静止と閉鎖を打ち破るには，まさしく現在時制，文章に活発な動きを与える現在が必要だ。第一段階のそのままずっと続く静止をあらわした現在とはちがう。同じ現在時制を使いながら，作者は，静止した時間から動き，閉ざされた空間から空間を開く文体をつくる。

第二段落　B

この段落では，単純過去の時が動く。段落 A の突然の驚きをともなう軽快な動きと違って，着実に時の動きを示す。

1．流れる時間を示す語。

p.27，*l.*74

Le lendemain

その翌日

p.27，*l.*74

l'avant-veille

前々日

p.27，*l.*83

le jour suivant

次の日

二日にわたる継過が示される。従って，空間での動きもより多くなる。

2．空間の中での動きを示す語・句・文。

p.27, *l.*74

Bachir revint. Il s'assit…sortit son couteau, voulut tailler…, et fit si bien qu'il s'enfonça la lame dans la pouce.

バシルはまたやって来た。彼は座り…小刃をとり出し，削ろうとした…が，やりすぎて親指に刃をぐさっとやった。

p.27, *l.*77

…il en rit, montra la coupure brillante et s'amusa de voir couler son sang.

彼はそれを笑い，輝く傷口をみせた。そして自分の血が流れるのを見てうれしそうだった。

p.27, *l.*79

…il lécha plaisamment sa blessure;

…彼は，楽しそうに自分の傷口をなめた。

p.27, *l.*83

(Le jour suivant) il apporta des billes. Il voulut me faire jouer… J'hésitai, …le petit me saisit le bras, me mit les billes dans la main, me força. …mais j'essayai de jouer quand même. Enfin je n'en pus plus. …je rejetai les billes et me laissai tomber dans un fauteuil. …Marcelina rentra.

(翌日）彼（バシル）は，ビー玉を持ってきた。私に遊ばせようとした。…私はちゅうちょした…おちびさんは，私のうでをつかみ，手にビー玉を

おいて，私にやらせようとした。…しかしそれでも遊んでみた。だがもうできなくなった…ビー玉を落とし，いすにくずれ落ちた…マルスリーヌが帰ってきた。

第三段落

第一，第二段落に対してあらたな展開をこの段落はみせる。それも「突然」起る。

1．流れる時間を示す語・句・文。

p.27, *l.*93

Quelques heures après

数時間後

p.28, *l.*97

tout à coup

突然

p.28, *l.*102

jusqu'alors(−)

そのときまで

p.28, *l.*104

…me rejeter en arrière(−)

以前のことにもどす

p.28, *l.*106

(je me souvenais) à présent qu'…(−)

今，…（を思い出す）。

p.28, *l.*108

à présent

今

p.28, *l.*113

soudain

突然

p.28, *l.*115

jusqu'alors(−)

そのときまで

今まで，自然に時間は流れていたが，時間の切断がおこり，「突然」という語が頻出する。他方，マイナスの時間の流れ，「そのときまで」がくりかえされる。（− 記号で示す）。

2．空間の中での動き（私の動きを含む）を示す語・句・文。

p.27, *l.*94

Je me marchais péniblement…

やっとのことで私は歩いていた。

p.28, *l.*101

Je fis quelques pas chancelant…

よろめきながら数歩歩いた。

p.28, *l.*109

Je revint en arrière…

後にもどった。

空間の動きも否定的になり，止まる。

3．肉体の健康をあらわす語・句・文。

p.27, *l.*93

un crachement de sang

吐血

p.28, *l.*103

j'avais pensé que la guérison allait venir.

快復しつつあると私は思っていた。

p.28, *l.*111

un vilain sang noir

汚ない黒い血。

p.28, *l.*112

Je songeais au beau sang rutilant de Bachir

バシルの輝く美しい血を思った。

全て，健康を否定する語となる。

4．私の（心の）動きを示す語・句・文。

p.28, *l.*101

J'étais horriblement ému.

私は，ひどく心がさわいだ。

p.28, *l.*102

J'avais peur. J'étais en colère.

私は，恐怖を感じた。そして怒った。

p.28, *l.*108

Je commençais d'aimer la vie.

私は人生を愛し始めていた。

p.28, *l.*113

Et soudain me prit un désir, une envie, quelque chose de plus furieux, de plus impérieux que tout ce que j'avais ressenti jusqu'alors: vivre! je veux vivre.

そして突然，ある欲望，渇望が私をおそった。それは，それまで私が感じた全てのものより，激しくいたたまれない何かだ。生きる！　私は生きたい。

これら3段落は，読みやすい。実に論理的展開をするからだ。各段落，短かい場合10数行が，一つの主題を結論づける。そして次々と各段落が，それぞれのテーマを順序だてて，最後の結論にむかう。この論理の明解さが，「読み易さ」を読者に与える。

始めて躍動する現実があらわれる。自己の喪失，死から，生へと全てが動きだす。静止した時間が動く。閉ざされた空間に他者が入り，それを開く。感覚は，ただ視ることから，触れ，聴く。そしてミッシェルは動く。自から意志をもちはじめる。外界への欲求をもちはじめる。

バシルの健康と全く反する突然の黒い痰を契機に，彼は激しく真実生きたいという意志をもつ。

Ⅲ．マニュスクリの分析

以上のテキスト分析をふまえ，テキストとマニュスクリとの関わりについてみてみたい。前述のテキストの特徴にそって，マニュスクリがテキストとなったものも少なくない。この章では，とくに論理的に文体をととのえることが多い。それらの例には＊をつけた。また，文体上の問題から書きかえられたものも多い。識者には笑止すべき面が多々あると思うが，何故書きかえられたかを，私の仏語能力の範囲内であえて類推してみた。さらに，単に文体をととのえるために書きかえられたものは，漠然と明確化あるいは簡潔化：(style) clair ou simple と附記した。また書き言葉としての文章体への書きかえなどは，上品な文体ということで (style) soutenu とした。これらも識者のご批判をうけることになるだろう。しかしいずれにしろ，あえて書きかえの理由を想像し，それぞれにつけてみた。

ページ数，行数は，拙論末のテキストのものである。始めにマニュスクリ文，次に矢印によりテキスト文を記した。マニュスクリ→テキスト。書きかえが2回以上あるばあい，最後の文がテキストとなる。マニュスクリで線などにより消された文，黒くおおわれたものもすかして見ることで再現した。これらは×印で示した。/×…/。

p.24, *l.*2　Leur trouble souvenir
　→ Leur affreux souvenir
　　意味が強まる。soutenu

p.24, *l.*6　voit → aperçois
　　意味が強まる。soutenu

p.24, *l.*7 revenait → se réveillait

soutenu

p.25, *l.*11 fut → devînt

p.25, *l.*12 /× faisais/ de la vie/×

comme une/ palpitante découverte

→ devais faire de la vie la palpitante découverte

p.25, *l.*14 Quelques jours après

→ Le jour vint où

soutenu

＊p.25, *l.*14 (je pus me lever の後に)

Puis commçaient des jours sans heures

→ 削除

後出する Là coulèrent des jours sans heures に移動。二文の結びつきが重要。

p.25, *l.*25 /× ouvrait dans/× donnait sur/

→ menait à la porte

p.25, *l.*25; elle avait une comme la mienne sur une cour

→ une grande porte vitrée ouvrait sur la terrasse

clair

p.25, *l.*14 ナシ

→ Je fus complètement séduit par notre home. Ce n'était presqu'

une terrasse.

cf. p.25, *l.*22 マニュスクリ文 *l.*10–*l.*11。19 世紀末，英語 home がどのような意味を持っていたか定かでないが，今日の日本語のホームとほぼ同じようだ。

p.25, *l.*15 （上記…une terrasse の後に）Pour y descendre/× on sortait sur une terrasse, assez grande, elle se prolongeait en (au) tournant: on arriva un éscalier tournant/× terminait/ s'ouvrait sur une grande terrasse qui se prolongeait sur des toits;

p.25, *l.*17 /× on était au haut/… la partie des toits
→ on en avait atteint la partie la plus haute.

p.25, *l.*19 des palmiers → les palmiers

p.25, *l.*21 (dernières) mimosas
→ cassies

＊p.25, *l.*22 plantée de six palmiers
réguliers の後に次の長文あり。

De ma chambre une grande porte entreé ouvrait directement sur la terrasse.
/× Près de ma chambre, sur la terrasse encore, planté on ne sait pourquoi là, un bizarre Kiosque poussait;/
Là coulèrent ces jours/× sans heures/× calines jours/× Comment vous raconter cela?/
Qu'en dirai-je?
Qui n'a pas su la mort, vous dis-je, ne sait pas ce que c'est que

la vie. Je fus, dès que je pus les voir, complètement séduit par ces lieux. Comment Marceline avait-elle pu découvrir une si riante et commode demeure? Au moins dépensions-nous pas trop? Je m'enquiétai/× la terrasse/ qu'elle devait coûter bien cher…? "Non, nous n'excédons pas nos revenue, poursuit-elle, J'ai calculé. Aie confiance."

Je fis comme elle dit, me reposant sur elle, et je m'abandonnai doucement. Alors coulèrent des jours sans heures.

→ p.25, *l.*14−p.25, *l.*33 におきかえられた。

「時間のない日々が流れた」が二度くりかえされる。まさしくこれが，第一段落の主題だ。その日々を説明するために長文が書かれた。しかし，ミッシェルがマルスリーヌに守られ，心持よく過ごす住居は，home という英語一語で語りつくされ，客観的な住居の描写とただ見るだけの「時間のない日々の流れ」を提示するために，全てが簡明な文体におきかえられた。

p.25, *l.*35 me dit-elle → dit-elle

p.26, *l.*41 charmante → câline

p.26, *l.*41 prend sa main
→ lui prend la main

p.26, *l.*41 en découvrant
→ l'embrasse avec un geste qui découvre

p.26, *l.*48 (et) le travaille
→ commence à le travailler

p.26, *l.*49 Il semble vouloir en faire un sifflet.

→ C'est un sifflet, je croit, qu'il veut faire clair

p.26, *l.*52 (ses chevilles) sont (charmante)

→ ナシ

p.26, *l.*52 (les attaches) délicates

→ ナシ

p.26, *l.*53 se sert du → manie soutenu

p.26, *l.*59 de m'y interresser

→ de l'admirer clair

p.27, *l.*67 (laisse) un instant

→ ナシ

p.27, *l.*67 bientôt

→ au bout d'un instant

p.27, *l.*70 dit-elle

→ me dit-elle

p.27, *l.*71 Je ne sais où

→ partout

p.27, *l.*72 (tous me connaissent の後に)

— C'est donc là qu'elle allait tous les matins → ナシ

p.27, *l.*73 que demain il soit la,

→ qu'il soit là demain

p.27, *l.*77 la blessure → la coupure

p.27, *l.*78 (blanches の後に)/× sa langue/

→ ナシ

p.27, *l.*79 (il lécha のあいだに)

/× voulu/ → ナシ

p.27, *l.*81 (en lui: の後に)

/× je la sentais/× je comprenais/

→ ナシ

p.27, *l.*83 m'y faire → me faire

p.27, *l.*84 empêcha → retenu

p.27, *l.*85 ナシ

→ me mit les billes dans la main

p.27, *l.*86 (Je m'essoufflais の前に)

pourtant → ナシ

p.27, *l.*86 courber → baisser

p.27, *l.*87 (Enfin の前に)
→ Le plaisir de Bachir me charmait

p.27, *l.*88 ナシ
→ (Je) rejetai les billes

p.27, *l.*92 un peu las → fatigué

p.28, *l.*95 éloignée
→ occupée dans sa chambre

p.28, *l.*97 brusquement
→ tout à coup

p.28, *l.*102 Je prenais/× très/ naïvement avant que
→ Car jusqu'alors j'avais pensé que

p.28, *l.*103 qu'il ne/× me/ fallait que
→ qu'il ne restait qu'

p.28, *l.*106 cet effet
→ tant d'effet

p.28, *l.*107 horreur, terreur
→ horreur

p.28, *l.*108 ナシ → hélas!

p.28, *l.*109 me baissai → me courbai

p.28, *l.*117 de → vers

p.28, *l.*117 (段落…vers l'existence の後に)

Jusqu' à présent je n'avais pas fait ce qu'il faut, pensais-je, Je m'étais laissé vivre, abandonné C'est autre chose.– C'est une affaire de volonté.

→ ナシ

《テキスト文》

プレイアード版,「レシ, ソチ, ロマン」, pp. 380–383

II

1. POURQUOI parler des premiers jours? Qu'en reste-t-il?
2. Leur affreux souvenir est sans voix. Je ne savais plus ni qui, ni
3. où j'étais. Je revois seulement, au-dessus de mon lit d'agonie,
4. Marceline, ma femme, ma vie, se pencher. Je sais que ses soins
5. passionnés, que son amour seul, me sauvèrent. Un jour enfin,
6. comme un marin perdu qui aperçoit la terre, je sentis qu'une
7. lueur de vie se réveillait; je pus sourire à Marceline. — Pourquoi
8. raconter tout cela? L'important, c'était que la mort m'eût
9. touché, comme l'on dit, de son aile. L'important, c'est qu'il
10. devînt pour moi très étonnant que je vécusse, c'est que le jour

11. devînt pour moi d'une lumière inespérée. Avant, pensais-je, je
12. ne comprenais pas que je vivais. Je devais faire de la vie la
13. palpitante découverte.
14. Le jour vint où je pus me lever. Je fus complètement séduit
15. par notre home. Ce n'était presque qu'une terrasse. Quelle ter-
16. rasse! Ma chambre et celle de Marceline y donnaient; elle se
17. prolongeait sur des toits. L'on voyait, lorsqu'on en avait atteint
18. la partie la plus haute, par-dessus les maisons, des palmiers;
19. par-dessus les palmiers, le désert. L'autre côte de la terrasse
20. touchait aux jardins de la ville; les branches des dernières
21. cassies l'ombrageaient; enfin elle longeait la cour, une petite
22. cour régulière, plantée de six palmiers réguliers, et finissait à
23. l'escalier qui la reliait à la cour. Ma chambre était vaste, aérée;
24. murs blanchis à la chaux, rien aux murs; une petite porte
25. menait à la chambre de Marceline; une grande porte vitrée
26. ouvrait sur la terrasse.
27. Là coulèrent des jours sans heures. Que de fois, dans ma
28. solitude, j'ai revu ces lentes journées!... Marceline est auprès de
29. moi. Elle lit; elle coud; elle écrit. Je ne fais rien. Je la regarde.
30. O Marceline!... Je regarde. Je vois le soleil; je vois l'ombre; je
31. vois la ligne de l'ombre se déplacer; j'ai si peu à penser, que ie
32. l'observe. Je suis encore très faible; je respire mal; tout me
33. fatigue, même lire; d'ailleurs que lire? Être, m'occupe assez.
34. Un matin Marceline entre en riant:
35. 《Je t'amène un ami, dit-elle; et je vois entrer derrière elle
36. un petit Arabe au teint brun. Il s'appelle Bachir, a de grands
37. yeux silencieux qui me regardent. Je suis plutôt un peu gêné, et
38. cette gêne déjà me fatigue; je ne dis rien, parais fâché. L'enfant,

39. devant la froideur de mon accueil, se déconcerte, se retourne
40. vers Marceline, et, avec un mouvement de grâce animale et
41. câline, se blottit contre elle, lui prend la main, l'embrasse avec
42. un geste qui découvre ses bras nus. Je remarque qu'il est tout
43. nu sous sa mince gandourah blanche et sous son burnous
44. rapiécé.
45. — Allons! assieds-toi là, lui dit Marceline qui voit ma gêne.
46. Amuse-toi tranquillement.》
47. Le petit s'assied par terre, sort un couteau du capuchon de
48. son burnous, un morceau de djerid, et commence à le travailler.
49. C'est un sifflet, je crois, qu'il veut faire.
50. Au bout d'un peu de temps, je ne suis plus gêné par sa prés-
51. ence. Je le regarde; il semble avoir oublié qu'il est là. Ses pieds
52. sont nus; ses chevilles sont charmantes, et les attaches de ses
53. poignets. Il manie son mauvais couteau avec une amusante
54. adresse... Vraiment, vais-je m'intéresser à cela?... Ses cheveux
55. sont rasés à la manière arabe; il porte une pauvre chéchia qui
56. n'a qu'un trou à la place du gland. La gandourah, un peu
57. tombée, découvre sa mignonne épaule. J'ai le besoin de la
58. toucher. Je me penche; il se retourne et me sourit. Je fais signe
59. qu'il doit me passer son sifflet, le prends et feins de l'admirer
60. beaucoup. — A présent il veut partir. Marceline lui donne un
61. gâteau, moi deux sous.
62. Le lendemain, pour la première fois, je m'ennuie; j'attends;
63. j'attends quoi? je me sens désœuvré, inquiet. Enfin je n'y tiens
64. plus:
65. 《Bachir ne vient donc pas, ce matin?
66. — Si tu veux, je vais le chercher.》

67. Elle me laisse, descend; au bout d'un instant, rentre seule.
68. Qu'a fait de moi la maladie? Je suis triste à pleurer de la voir
69. revenir sans Bachir.
70. 《Il était trop tard, me dit-elle; les enfants ont quitté l'école
71. et se sont dispersés partout. Il y en a de charmants, sais-tu. Je
72. crois que maintenant tous me connaissent.
73. — Au moins, tâche qu'il soit là demain.》
74. Le lendemain Bachir revint. Il s'assit comme l'avant-veille,
75. sortit son couteau, voulut tailler un bois trop dur, et fit si bien
76. qu'il s'enfonça la lame dans le pouce. J'eus un frisson
77. d'horreur; il en rit, montra la coupure brillante et s'amusa de
78. voir couler son sang. Quand il riait, il découvrait des dents très
79. blanches; il lécha plaisamment sa blessure; sa langue était rose
80. comme celle d'un chat. Ah! qu'il se portait bien! C'était là ce
81. dont je m'éprenais en lui: la santé. La santé de ce petit corps
82. était belle.
83. Le jour suivant il apporta des billes. Il voulut me faire
84. jouer. Marceline n'était pas là; elle m'eût retenu. J'hésitai, re-
85. gardai Bachir; le petit me saisit le bras, me mit les billes dans
86. la main, me força. Je m'essoufflais beaucoup à me baisser,
87. mais j'essayai de jouer quand même. Enfin je n'en pus plus.
88. J'étais en nage. Je rejetai les billes et me laissai tomber dans
89. un fauteuil. Bachir, un peu troublé, me regardait.
90. 《Malade?》dit-il gentiment; le timbre de sa voix était exquis.
91. Marceline rentra.
92. 《Emmène-le, lui dis-je; je suis fatigué, ce matin.》
93. Quelques heures après j'eus un crachement de sang. C'était
94. comme je marchais péniblement sur la terrasse; Marceline était

95. occupée dans sa chambre; heureusement elle n'en put rien voir.
96. J'avais fait, par essoufflement, une aspiration plus profonde, et
97. tout à coup c'était venu. Cela m'avait empli la bouche... Mais ce
98. n'était plus du sang clair, comme lors des premiers crache-
99. ments; c'était un gros affreux caillot que je crachai par terre
100. avec dégoût.
101. Je fis quelques pas, chancelant. J'étais horriblement ému.
102. Je tremblais. J'avais peur; j'étais en colère. — Car jusqu'alors
103. j'avais pensé que, pas à pas, la guérison allait venir et qu'il ne
104. restait qu'à l'attendre. Cet accident brutal venait de me rejeter
105. en arrière. Chose étrange, les premiers crachements ne m'avaient
106. pas fair tant d'effet; je me souvenais à présent qu'ils m'avaient
107. laissé presque calme. D'où venait donc ma peur, mon horreur, à
108. présent? C'est que je commençais, hélas! d'aimer la vie.
109. Je revins en arrière, me courbai, retrouvai mon crachat,
110. pris une paille et, soulevant le caillot, le déposai sur mon mou-
111. choir. Je regardai. C'était un vilain sang presque noir, quelque
112. chose de gluant, d'épouvantable... Je songeai au beau sang ruti-
113. lant de Bachir... Et soudain me prit un désir, une envie, quelque
114. chose de plus furieux, de plus impérieux que tout ce que j'avais
115. ressenti jusqu'alors: vivre! je veux vivre. Je veux vivre. Je serrai
116. les dents, les poings, me concentrai tout entier éperdument, dés-
117. olément, dans cet effort vers l'existence.